

丹羽文雄の従軍

——（ペン部隊）から「還らぬ中隊」へ——

田 中 勳 儀

昭和十二年七月の蘆溝橋事件に端を発する「日中戦争」の全面化において、日本の作家が大挙して戦場を視察した、いわゆる（ペン部隊）の存在は有名である。久米正雄、浅野晃ら陸軍班十四名、菊池寛、北村小松ら海軍班八名の総勢二十二名が第一次（ペン部隊）^①に選ばれ、世間の関心を集めた。戦時下の作家の行動を検討する上で重大な事件と考えられるが、個々の作家の動静については必ずしも明らかではない。ここでは、当時（情痴作家）と目されていた丹羽文雄について、管見の及ぶ範囲でその足跡を追ってみたい。

一

昭和十三年八月二十二日、菊池寛から「内閣情報部が文芸家に何か相談したいことがあるそうですから、明二十三日の午後三時、首相官邸内情報部にお出で下さいませんか」^③との文面の速達葉書を受

け取った丹羽は、翌二十三日、情報部主催の懇談会に出席。「その席上文壇から二十人のペンの戦士を選んで陥落間近な漢口の最前線へ送るといふ内閣情報部の文壇動員計画が発表され出席の人々は挙つて賛成」^④したという。十二名の出席者のうち、横光利一、白井喬二、北村小松は即答を避けた節があるが、丹羽は賛意を表したらしい。人選を任された文壇を代表して菊池寛が二十五日に従軍希望者の名簿を提出。二十六日に従軍作家二十二名が正式に決定された。

当時の各紙には、「堂々征く、文芸部隊」の大見出しの下、「文学戦士の面々」の顔写真が掲載されている。^⑤この企画に対する反響はさまざまで、選に漏れた萩原朔太郎は「彼等の従軍によつて、事変の本質的なリアリティが認識され、現に僕等の頭脳の中にモヤ／＼してゐる、不可解の朦朧意識を一掃してもらひたい」^⑦と期待を表明し、評論家河上徹太郎は「代議士の視察旅行に類した、精神的

なお大名旅行をしないことだ^⑧と注文をつけている。一方、軍部からは、たとえば鈴木庫三陸軍少佐が「一流の文士諸君が奮つて従軍を志願し、得意の筆によつて報国の誠を致さうといふ企て」を「快挙」と賞したうえで、「改めて従軍の作が出なかつたら出なくともよい^⑨」と、度量の大きいところを見せている。

九月六日正午、情報部主催の懇談会が再度開かれ、「文士側は十二名全員出席^⑩」、日程等を聞いた。丹羽はこの時点までに陸軍班十四名のうちに所属することを知らされた。そして、陸軍班の出発当日。九月十一日正午、レインボー・グレルに集合、他の十二氏（白井喬二のみ別行動）とともに明治神宮に参拝して「皇軍の武運長久を祈願^⑪」した。この折の写真が『文芸年鑑一九三九年版』（昭和14・10・10、第一書房）に掲載されているが、他の作家がすべて軍服まがいの国民帽（久米正雄はヘルメット帽）、国民服にゲートルを着用している中で、ひとり丹羽のみがソフトに背広という平服で参道を歩く姿が際立っている。戦後、この写真に眼を留めた平野謙が、「こいつはいい、と思はずあなたに好感をよせずにはゐられませんでした^⑫」と述べたのを受け、「軍部にどう見られようと、仲間どう見られようと、さういふことにはいつかう無神経な私であつた^⑬」と答えた丹羽には、軍人と一線を画したい気持ちが強かつたやうである。

一行はその足で東京駅に赴き、午後三時、「情報部西村書記官はか陸軍、文壇関係者数百名の熱狂的な歓送をうけて」特急「富士」で出発。横浜、小田原など各駅ごとに熱心なファンに送迎されつつ、西下した。車中では、「ぜひ漢口を見てきますよ」と意気込む片岡鉄兵、「できるだけ最前線に出てみたい」と興奮を隠さない深田久弥、「男のみなさんより支那にかけてはあたし先輩よ」と喜ぶ林美美子らで、盛りあがった^⑭。このころの報道には総じてお祭騒ぎの気分がある。

「筆勝」の意気たかく、ペンの戦士出陣」と題した「アサヒグラフ」第三十一年第十三号（昭和13・9・28）には、車中の写真と従軍作家の筆跡が載せられている。「秋高したゝひた押しに征くこゝろ」（佐藤惣之助）、「秋深く壮士亦多感なり」（尾崎士郎）、「平服の特務兵として」（岸田国土）等、気負い立った文句が多い中で、丹羽は「いいものが書きたい」とだけ記している。また、他の作家たちが例の国民服姿で、ことさらに日の丸の扇子を示しているのに対し、丹羽はズボン吊りをした平服のダンディな容姿でカメラに収まっている。たとえば後年、村松定孝氏が「流石に丹羽さんは便乗した文句を書かねえな」とわれわれ文学青年達は、その態度に好感を持った^⑮と述懐しているように、ここには作家としての自覚を保とうとする姿勢が見出せる。

この日は車中泊。当時の『時刻表』^⑮によれば、特急「富士」は九月十二日午前九時三十分、下関着。そのまま、関門連絡船、鹿児島本線と乗り継げば、午前十一時四十三分に博多に到着する。一行はこの日は福岡に泊った模様で、翌十三日午前十時、久米、片岡、佐藤、川口、浅野、深田、林の七名が陸軍班第一陣として、福岡雁巣飛行場からダグラス機で上海へ向った。^⑰丹羽は、尾崎、岸田、白井、瀧井、富澤、中谷とともに第二陣として、九月十五日午前十時五十三分、やはり雁巣飛行場から後を追って飛び立った。^⑱そして、同じ「十五日上海に勢ぞろひしプロードウェイ・マンシヨンと東亜ホテルに投宿」^⑲した。

九月十七日、「軍報道部馬淵中佐に連れられ上海近郊の激戦地を視察」、「川口松太郎、久米正雄両氏は非常にはりきつてをり、叢のなかにいままほ敵の死体があると聞くと雑草を踏み分け駆け廻るといふ有様」^⑳が報じられている。丹羽も同行したはずだが、目立った動きはみせていない。十八日、深田、林を除く丹羽ら十二名は杭州へ行き、「十九日は早朝から各方面敵陣地、名利を見物、二十日上海に引揚げた」^㉑。

この間の事情について、丹羽自身、「漢口攻略従軍記―杭州と蘇州」(「婦人公論」23―11、昭13・11)という現地報告を綴っている。「上海から汽車で杭州に来るまでに、私は幾度錯覚をおこしたか判

らない。(略)それほど車窓に映る風景は内地とおなじであつた」と、中国のクリークに日本の田園風景を重ね合わせた丹羽は、一種の懐かしさを感じている。しかし一方、杭州の街の有志が張発奎軍に金を積んで退去させたという風聞を聞いて、「かういふところにも、今度の事変に相手が国を挙げて立ち向つて来られない弱味と矛盾があるのだ」と断ずるところには、中国民族への蔑視がみられる。また、ヒットラー・ユーゲントの「成長」を考えた時、「私の細々とした、脆弱な芸術家的な神経はやがて消えていく運命にあつた」と述べるなど、現地を垣間見た丹羽は、早くも作家としての危機に見舞われている。

このあたりから新聞報道が少なくなってくるので、丹羽と行動を共にすることが多かった白井喬二の『従軍作家より国民へ捧ぐ』(昭13・11・15、平凡社)(以下、「白井」と略す)を援用しながら、さらに丹羽の動静を追っていく。白井は日時を細かく記しており、作家の行動を跡づけるのに役に立つからである。さて、「二十一日から滬寧鉄道の旅」(白井)で蘇州へ。丹羽は改札口に入ろうとした時、リュックサックが宿から届けられていないのに気がついて困惑、「二ト列車おくれやれと覚悟」を決める。待合室でたまたま火野葦平と出会い、歓談した後、「昼前に見送られて上海の駅を発つた」(丹羽「漢口攻略従軍記」)。蘇州で一行に追いついた丹羽は、

検問の兵士の苦勞に「前線同様の根気強さ、不撓の精神力」を見出して、これまでの「いくらか遊覧気分をまじへてゐた自分を烈しく恥ぢ」、「一刻も早く戦線へ出たいと思つた」(同)。

蘇州で一泊した後、二十二日午前十時発の汽車にて南京にむかふ(白井)。南京で数日滞在。「九月二十六日午前十時、御用船〇〇丸に便乗して」(白井)揚子江を遡り、九江に向け出発した。蕪湖、太子磯、彭澤と、江上で三泊。九江には二十九日「午後一時半つひに入港」(白井)した。

この間の丹羽の様子は、帰国後の報告「大陸の思ひ出」(「秋冷抄」昭15・9・20、砂子屋書房、所収)から窺える。「南京から九江に溯航する途中、迫撃砲と野砲で撃たれた」事件もあり、丹羽は「支那の戦地の夜」に「原始的な夜の恐怖」を味わう。そして、「戦地の夜といふ題材だけでも人々を感動させるものは十分に書けるのである。が兵隊はいつもさやうな感動を踏みつけて、銃を持つてゐる」ことに感心する。「兵隊の心理といふものは人間に許されてゐる最高の境地を実現してゐるのだといふことは、一と足戦地にふみこんで見て、しみ／＼と判る実感である」とまで称揚する丹羽の発言には、非戦闘員としての引け目や、兵士に対する素朴な感動が露出している。なお、この九江行を共にしたのは、久米、白井、岸田、佐藤、尾崎、川口、富澤、浅野、丹羽の九名だった。^②

つづいて「三十日附近戦跡を見ていよ／＼前線に向つて従軍した」^③との新聞報道があるが、具体的に分かるのは、「十月三日午前七時、九水丸といふ小船に乗つて」「最前線星子に向ふ」(白井)ことである。丹羽も「私達がそこへ辿りついたのは十月の三日であり、四日には金輪峰を右に、東孤嶺を左に見て進んだが、戦線はそれほど進んでゐなかつた」(丹羽「大陸の思ひ出」と述べている。このあたりが丹羽がもつとも前線に近づいた地点といえよう。

この日のうちに九江へ戻つた丹羽らは、翌十月五日、「〇〇飛行場に見学に行」き、「丁度今これから永修方面の敵を爆撃に行く所だから希望者は一機に一人づゝ同乗させる」(白井)との軍部の提案を受け入れる。丹羽も「陸軍の重爆機にのり、虬津街を爆撃」、「その時軍曹の一人が敵陣めがけて伝單を撒くことになつた。私も手伝つて下界めがけて伝單を投げ下した」(「大陸の思ひ出」といふ。直接、銃を握らずとも、宣伝活動をとおして戦いに参加したわけである。

その後しばらくして、白井喬二は南京に戻つたので、丹羽の以後の動静は必ずしも明白ではない。ただ、「従軍文芸家武穴鎮前進紀念、久米正雄、富澤有為男、浅野晃、丹羽文雄、岸田国士、昭和十三年十月八日」と寄せ書きした色紙が残っているので、丹羽を含めた五名は十月八日、武穴まで前進したことがわかる。その中のひと

り岸田国土によれば、「武穴の対岸馬頭から〇〇部隊の陽新攻撃を見に行く」²⁵計画があつたようだが、丹羽は「武穴で猛烈な下痢をやり、赤痢ではないかと九江で養生」（「大陸の思ひ出」）する。岸田もまた馬頭で激しい歯痛に襲われ、「全身の疲労甚だしく」九江に戻つたことを考え併せると、東京を出発して一ヶ月近く経つた現在、作家たちに体力の限界がやってきたと考えるべきかもしれない。

丹羽は「九江からは病院船によつて、私は南京に戻つた。船中で二人の少尉と知合になり、『還らぬ中隊』を書くヒントを与へられた」（「大陸の思ひ出」）という。前線へ出ることを望んだ健康時に忘れられていた作家意識が、逆に肉体が病を得た時に蘇つてきたのは興味深い現象である。この時、丹羽の頭に帰国後の作家活動が思い浮かんだことは間違いない。

前線では武漢攻略が予定どおりに進まなかつたこともあり、やがて、「陸軍ペン部隊白井喬二、尾崎士郎両氏は十五日午後一時十分福岡飛行場着定期便で上海より帰来」²⁶の新聞記事が示すように、陸軍班の面々も追い追ひ帰国していった。ようやく十月二十六日、日本軍は漢口・武昌を占領、二十七日には漢陽を占領して、いわゆる「武漢三鎮陥落」を祝つた。陸軍班のうち、陥落後の武漢に入った作家には久米正雄、片岡鉄兵、林芙美子らがいる。

その頃、丹羽は上海で予後を養つており、「新申報」という親日

新聞社の二階から提灯行列を眺めていた。「雨が降つてゐた。支那の子供達は濡れながら、旗をふり、『何日君再来』を幼い口で合唱しながら、新聞社の前に来ると萬歳を三唱した」（「大陸の思ひ出」）。帰国後も「その時の複雑な印象がまざまざと思ひ出される」（同）という丹羽は、他国を戦場とする日本軍の勝利に、そして自国の荒廃のうえに「命がけの響」を込めて萬歳を唱和する「親日支那の子供達」に、何か割り切れない思いを抱いたようである。

他にも、「或る日本人の食料品店の主人は、特に私達従軍作家に反感をもつてゐて、あんた達はかへりたいと思へばいつでもかへれる結構な身の上だと皮肉つた」（同）事実を書き留めるなど、必ずしも暖かいとはばかりはいえない現地の日本人の眼差しを感じとつてゐる。さすがに兵士の反応まで書き留めるのは憚られたようだが、生命の危険に直面しつつ実践に従事している者からすれば、（ペン部隊）の作家などお大名旅行に思えたであろうことは想像に難くない。

丹羽が十月二十七日まで上海に滞在していたことは確かである。しかし、いつ帰国したかは判然としない。ただ、「陥落間近な漢口の最前線へ送るといふ（略）文壇動員計画」²⁷の趣旨からして、陥落後、程遠くない日に中国を離れたことと推察できる。

帰国後の作家たちは講演会に招かれることが多かった。林芙美子

が朝日新聞社系、岸田国士が文芸春秋社系、丹羽文雄は中央公論社系と、截然と分かれているのは、作家とそれを後援する出版社の關係を思わせて面白い。一例を挙げれば、十一月二十一日午後六時より日本青年館（明治神宮外苑）で催される「中央公論社主催、従軍文士報告講演会」の予告チラシが「中央公論」十二月号に綴じ込まれている。「抗日第二の巢窩武漢はまたなき劫火の裡に潰えた。この戦史曠古の大攻防戦に参加し文学の眼と心を以て具にその状を觀了したたつたペン部隊は今や日本知識層に何を訴へ告げむとするか？ 聴けその熱と力の声！」の惹句とともに、富澤有為男、尾崎士郎、丹羽文雄の講演、中央公論社社長嶋中雄作の挨拶の後、さらに石川達三の講演が準備されている。

以上、確認した昭和十三年八月以降の（ペン部隊）における丹羽文雄の動靜を、次に日誌風に示しておく。

8月23日 内閣情報部主催の懇談会に出席。文壇動員計画を受諾。

26日 （ペン部隊）メンバー二十二名決定。丹羽は陸軍班に所属。

9月6日 内閣情報部主催の懇談会に出席。日程を聞く。

11日 陸軍班十三名、明治神宮参拝後、午後三時、特急「富士」で東京駅を出発。白井喬二のみ別行動。

12日 午前九時三十分、下関着。のち福岡へ。

13日 陸軍班第一陣七名、午前十時、福岡雁巣飛行場より上海へ出発。

15日 陸軍班第二陣七名、午前十時五十三分、福岡雁巣飛行場より上海へ出発。丹羽もこの便に搭乘。

陸軍班十四名、上海に集合。ブロードウェイ・マンションと東亜ホテルに投宿。

17日 上海近郊の戦跡を視察。

18日 汽車で杭州へ。戦跡を視察。

20日 上海に戻る。

21日 滬寧鉄道で蘇州へ。丹羽は一と列車遅れて、たまたま火

野葦平に会い、見送られて、昼前出発。蘇州で一行と合流。

22日 午前十時発の汽車で南京へ。戦跡を視察。

26日 午前十時、御用船で九江へ向けて出発。途次、砲撃を受ける。

29日 午後一時三十分、九江着（久米・白井・岸田・尾崎・川口・富澤・浅野・佐藤・丹羽）。

30日 付近の戦跡を視察後、各自、前線に向けて出発。

10月3日 午前七時、丹羽・白井・岸田ら、九水丸で星子へ向けて出航。三時間後、湖口に到着。のち星子へ。

4日 前線の金輪峰・東孤嶺間を進む。のち九江へ戻る。

5日 九江の飛行場から陸軍の重爆機に乗り、虬津街を爆撃。

伝単を撒く。

8日 武穴へ前進（久米・富澤・浅野・丹羽・岸田）。

このころ、武穴で丹羽は猛烈な下痢を患い、九江に戻って養生に努める。やがて、病院船で南京に引き返す。この船中で二人の少尉と知り合いになり、「還らぬ中隊」を書くヒントを与えられる。のち、上海へ。

15日 白井・尾崎、帰国。

26日 日本軍、漢口・武昌を占領。

27日 日本軍、漢陽を占領（武漢三鎮陥落）。のち、久米・片岡・林ら入城。丹羽は上海で報道に接し、提灯行列を見る。

?日 帰国。

11月1日 「婦人公論」十一月号に「漢口攻略従軍記―杭州と蘇州」を発表（九月に執筆、現地から送稿したものか）。

21日 従軍文士報告講演会（於、明治神宮外苑日本青年館）で、

富澤・尾崎・石川とともに講演。

一一

帰国後の丹羽の第一作は、中国での体験に基づいた「還らぬ中隊」である。この作品は「中央公論」第五十三年第十二号（昭13・12）に発端を発表、同誌次号、第五十四年第一号（昭14・1）をもって完結した。

十二月号に付載された作者の「断書」によれば、「十一月号に従軍記録、十二月号に小説といふことになつてゐ」たが、意外に手間どつたので、小説の発端のみを掲載した由である。「出発の時には、十分十二月号に小説が書けるつもりでゐました。申訳ありません」と記しているように、出発前から出版社と契約ができていたわけである。なお、本作は十二月号の目次では「従軍小説」（傍点引用者、以下同）と銘打たれている。同誌には前述の中央公論社主催の「従軍文士報告講演会」で肩を並べた、富澤有為男「中支戦線」、尾崎士郎「揚子江の秋」が併載されており、「大武漢戦従軍記」のコーナーにまとめられている。このことから、作家を専属化させたい出版社の意図は明らかだが、より注目すべきは、丹羽に小説創作への意欲が強いことである。すでに同社系の雑誌「婦人公論」十一月号に現地から「漢口攻略従軍記」を送っている丹羽は、帰国後は創作をめざしたのであろう。これは従軍作家の大半が従軍記の類しか

発表していない状況において、特筆すべきことである。

最前線に出る機会はなかったにしても、書齋の作家にとつては強烈な体験であつたろうし、それを整理し抽象するには時間が必要であつたろう。また、改めて従軍の作がなくなるともよいとの情報部の意向は、作家の気分を楽にしたとも思われる。あるいは、同年、世間を賑わせた石川達三の「生きてゐる兵隊」（『中央公論』昭13・3）筆禍事件が作家を畏縮させたことも考えられる。そのような中で、早く、博多への車中で「いいものが書きたい」と作家意識を旺盛に示していた丹羽は、積極的に創作に取り組んだ。このころ、一年に五十作前後の小説を発表する程の並外れた筆力を見せているだけに、自信も持っていたはずである。しかし、丹羽の帰国は十月二十八日以降であり、また「中央公論」十二月号の発売日は、同誌に十一月二十一日開催の「従軍文士報告講演会」の予告チラシが綴じ込まれていることから考えて、遅くとも十一月中旬以前であつたはずで、執筆に許された時間はあまりにも短い。仮に中国滞在中に書き始めたとしても「還らぬ中隊」を書くヒントを与へられた」病院船に乗つたのは十月八日以降であり、雑誌の印刷工程も勘案すると、執筆期間は一ヶ月に満たない。丹羽が一気に書き下ろせなかつた主な理由は、執筆期間の不足にある。

「還らぬ中隊」の第二章後半部分から第七章末尾（完結）までが

発表された昭和十四年一月号の創作欄には、石川達三の「武漢作戦」が並んで掲載されている。周知のように「武漢作戦」は、「生きてゐる兵隊」が発禁処分に近い、禁固四ヶ月執行猶予三年の第一審判決を受け上告中だつた石川が、（ペン部隊）とは別に中央公論社特派員として武漢作戦を取材した体験に基づいて書き上げた作品である。石川自身、作品末尾に「出来るだけ忠実な戦記を構成して見ようとした。小説ともつかず記録ともつかぬ中途半端なものになつてしまつた」と付記しているように、日記形式を採用した従軍記的色彩の濃い内容となっている。目次では「小説」と銘打たれているものの、本文の表題では「戦史の一部として」とわざわざ副題が付けられている。この付記や副題が戦後版では削除された事実が示すように、石川はかなり当局の眼を意識していた。その甲斐あつてか、「武漢作戦」は、上海で（ペン部隊）の案内役だつた当時の報道部長馬淵逸雄に「見事に名誉を恢復した」^⑧作品と認められた。

本来、創作の基盤となるべき虚構精神を発揮して「生きてゐる兵隊」を書いた石川でさえ、従軍記的な形式に後退したこの時期に、同じ武漢作戦の従軍体験に基づいた作品を「小説」として発表した丹羽には、しだいに制約が厳しくなる時代状況への顧慮は、比較的小ない。

「還らぬ中隊」は、Y A新聞九江支局に一年半前から駐在してい

る記者酒井庸三が、前線に出掛けては記事を書き、また支局に戻る生活を叙している。鍵木部隊に所属する三宅中隊に随伴した酒井は、戦場で激しい下痢に襲われ自分の死体を眺める幻覚に陥る。その間、部隊長が記した「陣中日記」を活用しながら、住職出身の伍長の活動、上官と部下との家族的な紐帯等々、さまざま人間模様が描かれる。そして、出身地を同じくするいわゆる「町内部隊」の兵士が戦闘のなかで次々と死んでいき、黒火街の駱駝山攻略戦で壊滅した後、残された中隊長の遺書を酒井が写し取る場面で作品は閉じられる。

末尾の「付記」で、丹羽が「この一篇に現れる固有名詞や地形及び戦闘時日は、(略)わざと事実によらないことにしました」と断っている以上、モデルを詮索することにはあまり意味がないかもしれない。しいていえば、作中で鄱陽湖畔を修水方面へ向けて進もうとする三宅中隊の進路(四)が記されているので、九江―永修―南昌を結びいわゆる「武漢防衛第一線」突破に属する作戦と推察できる。そして、中隊が全員戦死した駱駝山は、「木の幹をつかみ、叢をつかんで登るのだつたが、山肌にとりついてみると、思ったよりも險しかった。(略)敵からも撃ちにくいのか、弾は樹木の中程から上の方にばしばしと当つた」(七)と記される險阻な崖であり、丹羽が「大陸の思ひ出」で、「胸つく急峻な山である。手ぶらでよ

ちのぼるだけでも大変だが、銃をもつて、上から狙ひうちしてゐるところをのぼっていくのだから、打撃は大きかつたに違ひない」と記した「金輪峰」がモデルと考えられる。だとすれば、十月四日に見聞した風景や逸話を作中に活かしたことになる。

下痢に悩まされた件も含め、本作が丹羽の従軍経験を反映していることは間違いない。しかし、作品化に当たつて丹羽は、主人公を作家ではなく新聞記者に、短期の瞥見ではなく長期の駐在に虚構化した。そして、戦場での生活が長くなるにしたがい、「文化人としての鎧をぬぎすてて、一介の現実主義者に還つたといふこと」(二)を認める一方で、「しかし戦争は酒井らを喰ひつくしはしないのだ」(四)と自我を失うまいとする葛藤が描かれる。また、「いくら文化的な高い目的からとは云へ、戦略的にも戦術的にも何一つ役に立たない新聞記者」の身に「負目」(一)を感じる一方で、中隊長の遺書を写し取る時、「特ダネをとつたときの凱歌の奏したくなる気持」を押さえきれず、戦死者を悼みつつも「新聞記者といふものにはいつの場合にも多少の冷淡がつきまとうものではないか」(七)と自身の心情を肯定する記者の職業的自覚が巧みに描き込まれている。

戦後の発言だが、丹羽は「還らぬ中隊」の中に「娑婆人と軍人は別の人種だ、自分にはとうてい戦場にとけこめないという苦しさと矛盾と距離を、はつきり書きこんでおいだ」²⁹と公言している。今日

の眼からみて、作中には誤った中国理解や時局に迎合した叙述などもあって、一概に認めるわけにはいかないが、丹羽の創作意図はこの「苦しさ」と矛盾と距離」の描出にあったと信じてよいだろう。それをルポルタージュ形式ではなく、総合的な小説形式で発表したところに本作の意義がある。

考えれば、武漢陥落の祝勝気分が醒めやらぬ雑誌の新年号に、たとえ一中隊の戦闘とはいえ、日本軍の敗北を文字どおり「還らぬ中隊」のタイトルで発表するとは、度胸の据わった行為といえよう。もちろん、犠牲を乗り越えて進軍する勇ましい皇軍兵士を称揚する作品とすれば、筆禍に問われる危険はなかったことになる。しかし、石川の「武漢作戦」と並べてみる時、無防備とさえ感じられる丹羽の執筆態度は、創作へのあくなき意欲が現れたものと解せられる。当の石川も、丹羽を「結末の大変な戦闘などの筆致を見ると、どんな大がかりな小説でも立派に書いて行ける作家だと思ふ」と評し、「他の全作品よりも『還らぬ中隊』の将来に期待^⑧」している。

他に同時代評としては、本作の「強靱な筆力」を称え、「大陸政策をあげつらつたり、生半可な政治論を口にしてゐる連中を尻目ににかけて、丹羽は黙つて大陸小説といふものをひねり出すに違ひない^⑨」と確信する須磨肇、「つねに過去をつき離してゐる」丹羽の「転回の一里塚^⑩」と位置づけるS・Oなどが見出せる。「戦争の道義

化について」や「日本人の力について」の政談に多くを費やした岸田国土『従軍五十日』（昭14・5・8、創元社）、「私達の現実戦」や「戦ひを決するもの、使命」を声高に叫ぶ富澤有為男「中支戦線」（中央公論）昭13・12）等比べて際立つ丹羽の創作力・表現力が批評家に認められたのもっともだし、「贅肉」（中央公論）昭9・7）「愛欲の位置」（改造）昭12・6）等で〈情痴作家〉と決めつけられた丹羽が新境地を拓いたと、驚きをもって受けとめられたのが実相であった。

『還らぬ中隊』は、雑誌完結の翌々月、昭和十四年三月三日付で中央公論社から刊行。早くも四月十五日に再版されたところをみると、よく売れたらしい。ただし、それも相対的な事象であり、当時の火野葦平の人気には及ばない。『麦と兵隊』は初版が昭和十三年九月十六日、二ヶ月後の十一月十日には十刷を数えているし、第二作『土と兵隊』は昭和十三年十一月二十四日初版のわずか八日後、再版が刊行されている。書籍の刊行日付をそのまま信じることに問題はあっても、火野葦平ブームが読書界を席捲していたのは確かである。

杭州湾上陸作戦に下士官として参加し、徐州戦前に報道班員に登用された火野の作品は、実戦体験に裏づけられているだけに、兵士を大陸に送り出した国内の家族たちの、中国戦線の実状を知りたい

という欲求に合致したのであろう。火野の著作は中川一致装、ふんだんに写真が挿入された日記形式の作品で、読者の欲求によく応えている。『還らぬ中隊』は藤田嗣治装だが、従軍記類によくある写真や挿絵はない。これは、火野と丹羽の著作がまったく異質であることを象徴している。

大きな火野ブームの最中、従軍はしても実戦経験のない（ペン部隊）の作家たちは、ルポルタージュ以外の作品を書きにくい側面があったのだろう。そんな中で、「娑婆人と軍人は別の人種だ」と自覚し、「いいものが書きたい」と望んだ丹羽は、あえてドキュメンタ的な方法を排し、本格的な小説をめざしたのである。

太平洋戦争開戦でしだいに緊迫の度を加えた後年、海軍に徴用された丹羽が、本作同様、新聞記者森を主人公にして戦場での生活を叙した小説『報道班員の手記』（昭18・4・19、改造社）は発禁処分を受ける。「生きてゐる兵隊」事件があったとはいえ、「還らぬ中隊」が受け入れられたこの時代は、まだ権力の許容範囲は比較的広がったとはいえよう。

注

①（陸軍班）久米正雄、浅野晃、尾崎士郎、片岡鉄兵、川口松太郎、岸田国士、佐藤惣之助、白井喬二、瀧井孝作、富澤有為男、中谷孝雄、丹

羽文雄、深田久弥、林美美子。

②（海軍班）菊池寛、北村小松、小島政二郎、佐藤春夫、杉山平助、浜本浩、吉川英治、吉屋信子。

③ 他に、土師清二、甲賀三郎、長谷川伸、中村武羅夫ら、大衆文学系作家を中心とした海軍南支派遣部隊などがある。

④ 高崎隆治「文学者の迎合主義」（『戦争と戦争文学』昭61・8・1、日本図書センター）

⑤ 「昭落近き漢口戦線へ」文学部隊「も出動」（『大阪朝日新聞』昭13・8・24）

⑥ 菊池、久米、吉川、白井、横光、片岡、尾崎、佐藤（春）、小島、吉屋、北村、丹羽が、文壇側から出席した。

⑦ 「堂々征く」文芸部隊——菊池寛氏はじめ廿二氏決り愈よ漢口大攻略戦へ進軍」（『大阪朝日新聞』昭13・8・27）

⑧ 萩原朔太郎「文士の従軍行」（『東京朝日新聞』昭13・9・3）

⑨ 河上徹太郎「文士の従軍」（『東京朝日新聞』昭13・9・2）

⑩ 鈴木庫三「従軍文士に期待」（『東京朝日新聞』昭13・9・3）

⑪ 「文士部隊は空陸から出発——陸軍は十一日、海軍は十四日」（『大阪朝日新聞』昭13・9・7）

⑫ 「ペンの陸軍部隊」出動（『大阪朝日新聞』昭13・9・12）

⑬ 平野 謙「告白」をめぐって（『文芸往来』3—8、昭24・9）

⑭ 丹羽文雄「私の言ひ分」（『文芸往来』3—8、昭24・9）

⑮ 注①に同じ。

⑯ 村松定孝「戦火の試練」（『丹羽文雄』昭31・7・28、東京ライフ社）ただし、村松氏は丹羽の筆跡を「よい小説が書きたい」と誤記し、他の作家が「一死君恩に報いん」「尽忠報国」など勇ましい文句を書いたとするが、「アサヒグラフ」掲載の文面とは異なる。

①6 鉄道省編「汽車時間表」10—12（昭9・12・1）。やや古い資料だが、次の大幅な改正は関門トンネル開通に伴う昭和十七年十一月なので、これを利用した。

①7 「『ペン』の陸軍部隊」空路上海へ（「大阪朝日新聞」昭13・9・14）

①8 「『ペン』部隊」陸軍班福岡を出発（「大阪朝日新聞」昭13・9・16）

①9 「従軍ペン部隊上海に勢揃ひ」（「大阪朝日新聞」昭13・9・16）

②0 「激戦の跡を弔ふ—ペン部隊一行の感慨」（「大阪朝日新聞」昭13・9・19）

②1 「陸の『文士部隊』」杭州へ（「大阪朝日新聞」昭13・9・22）

②2 「ペン部隊前線へ」（「大阪朝日新聞」昭13・10・1）

②3 注②に同じ。

②4 「従軍文芸家紀念寄せ書」（第98回古書籍大即売会出品目録抄）平2・12・26—30、大阪心齋橋そごう）

②5 岸田国土「九江」（「従軍五十日」昭14・5・8、創元社）

②6 「陸軍ペン部隊の二氏帰還す」（「大阪朝日新聞」昭13・10・16）

②7 注④に同じ。

②8 馬淵逸雄「戦争文学と従軍文士」（「報道戦線」昭16・8・4、改造社）

②9 丹羽文雄「挿話」（「告白」昭24・3・15）

③0 石川達三「中堅作家を描く—丹羽文雄の態度」（「文芸」7—5、昭14・5）

③1 須磨寧「人物時評—丹羽文雄」（「文芸」7—1、昭14・2）

③2 S・O「文学的人物論—丹羽文雄」（「文芸」7—8、昭14・8）

〔付記〕

引用に際し、漢字は原則として新字体に改め、ルビを省略した。